

赤ちゃんのときは、予防接種は保護者の判断と決定で実施されますが、思春期の予防接種では説明や同意のプロセスが重視されます。思春期に接種する可能性があるワクチンについて、解説します。

◎ DT ワクチン（11～12歳・定期接種）

乳幼児期に1期としてDPT-IPV四種混合ワクチン（ジフテリア・百日咳・破傷風・ポリオ）を初回接種3回、追加接種を1回行います。また、2期として11～12歳（小学6年生）時にDT二種混合ワクチン（ジフテリア・破傷風）の接種を1回行います。DPT-IPV四種混合の1期によって得られた免疫はじょじょに低下していくため、小学6年生で追加接種をする必要があるのです。

◎ 日本脳炎ワクチン（9～12歳で追加接種・定期接種）

日本脳炎ワクチンの標準的な接種スケジュールは、1期として、3歳で2回接種（接種間隔は1～4週間）、4歳で追加接種（2回目の約1年後）となっています。2期として9歳から12歳で1回接種します。合計2期の定期接種です。日本脳炎ワクチンは2009年以降、現在の乾燥細胞培養タイプに切り替わり、積極的勧奨が再開されました。当初ワクチン供給不足が懸念され、従来型ワクチンとの併用が一時的に行われましたが、2010年夏以後は現在の乾燥細胞培養タイプとなっております。

◎ 麻疹・風疹・水痘・おたふくかぜワクチン（任意接種）

定期接種漏れしたMRワクチン（麻疹・風疹の生ワクチン）や、まだ未罹患で2回接種が終了していない場合の水痘ワクチン（定期接種開始は2014年10月1日）・おたふくかぜワクチンは、是非ともこの時期に見直して接種しておくことが勧められます。風疹は勿論、最近流行が話題になっている麻疹（発症者の殆どはワクチン未接種者 or 1回しか接種していない成人です）、おたふくかぜの後遺症による難聴など、これら4大疾患に対する予防の必要性は高いと思います。

妊娠初期の女性が風疹にかかることで赤ちゃんに障害が発生する先天性風疹症候群(CRS)というものがあります。低出生体重や、白内障・緑内障といった眼の異常、難聴、心疾患（心臓の病気）などを持って生まれてくるものです。1999年以来、年間0～2例でしたが、2012年10月～2014年10月の間、感染症発生動向調査に45例のCRSの届出がありました。厚生労働省は、CRSの発生を早期になくすとともに、2020年度までの風疹の排除達成を目標にしています。

◎ B 型肝炎ワクチン（水平感染予防の任意接種）

B 型肝炎ワクチンは B 型肝炎ウイルスの成分を使った不活化ワクチンです。従来の子感染予防（健康保険適用）に加え、2016 年 4 月以後の出生児に対して定期接種が開始されています。標準接種年齢は生後 2 ～9 カ月、対象年齢は 1 歳未満です。WHO（世界保健機関）は 1992 年、B 型肝炎の感染源の撲滅と肝硬変や肝臓がんなどをなくすために、出生後すぐに B 型肝炎ワクチンを定期接種として接種するように推奨していました。定期接種が適用されていない現在の思春期年齢に対しては、水平感染予防のための任意接種が推奨されます。

◎ HPV ワクチン（中 1 ～高 1・定期接種）

ヒトパピローマウイルス（HPV）は主に性行為で感染します。子宮頸がん予防のための HPV ワクチンには 2 価、4 価、9 価の 3 種類がわが国で承認されています。HPV ワクチンについては、中 1～高 1 が従来の子定期接種ですが、2022 年度より定期接種の積極的勧奨差し控えが中止となり、接種勧奨が再開されています。加えて、情報が届かなかつたために接種機会を逃した可能性があるとして、1997 年度～2005 年度生まれの女性に対して、2024 年度までの 3 年間は広い年齢層に無料接種（キャッチアップ接種）が行われています（2023 年度は 26 歳まで）。また 2023 年度には、子宮頸がんを 90%以上予防することが期待される 9 価 HPV ワクチン（シルガード）が定期接種化され、上記の年齢層に対して無料接種が開始されます。HPV ワクチンについては、40 ページに詳しい情報があります。

自分が子どもの頃、どんな予防接種を受けてきたかは、母子健康手帳に記録されています。おうちの人に、自分の母子手帳を見せてもらって、巻末の「ワクチン接種」記録欄に書きこんでおきましょう。

